

ケアハウスで看取りを行うということ ～介護員として向き合った看取り～



(法人名) 社会福祉法人 昭徳会
(施設種別) 軽費老人ホーム
(施設名) ケアハウス高浜安立
(サークル名) ザ☆カイゴマン
(発表者名) 石川 誠一郎
(機械操作者氏名) 瀬瀬 純司

1. 職場紹介

平成8年4月に入居定員50名の自立型のケアハウスとして開所。平成22年4月に定員の内30名を特定施設に転換することにより、特定施設と一般型の2種類のサービスが混在する形となりました。

2. 実践発表グループ紹介

構成人員		過去のQC活動 (事例研究) 件数	3件 (現メンバーでは0件)
現メンバーでの活動歴		構成メンバーの職種	介護員、看護員 生活相談員、栄養士
平均年齢			
月当たりの会合回数		主な活動時間	

3. テーマ選定理由

当施設は今年で開所20年を迎えました。この節目となる年に、貴重な経験をさせていただいた看取りについて振り返ることにしました。私は特定施設に転換した時から、介護員として勤務しています。その前は特養で5年間勤務をしました。私は、それぞれの施設で看取りを経験しましたが、ケアハウスと特養で違いがあると感じました。このことを明確にし、「ケアハウスで看取りを行うということは、どういうことか」について考えてみたいと思いました。

4. 今回の活動に関する施設長のコメント

ケアハウスの入居対象は、独居高齢者や高齢夫婦世帯で、家族による援助を受けることが困難な方たちです。その入居者さんが、最期まで過ごしたいと願って下さるなら、何とかその気持ちを大切に叶えたいとの想いで看取りを実施してきました。介護員のみならず職員の皆さんに精神的な負担を掛けてきましたが、課題を乗り越えていくことで、少しずつ昨日よりも前進していくことが出来ると思います。命と多く関わる介護員の仕事の重さとその意義をこのようにまとめていただき、本当にありがとうございました。

5. 当施設の状況について

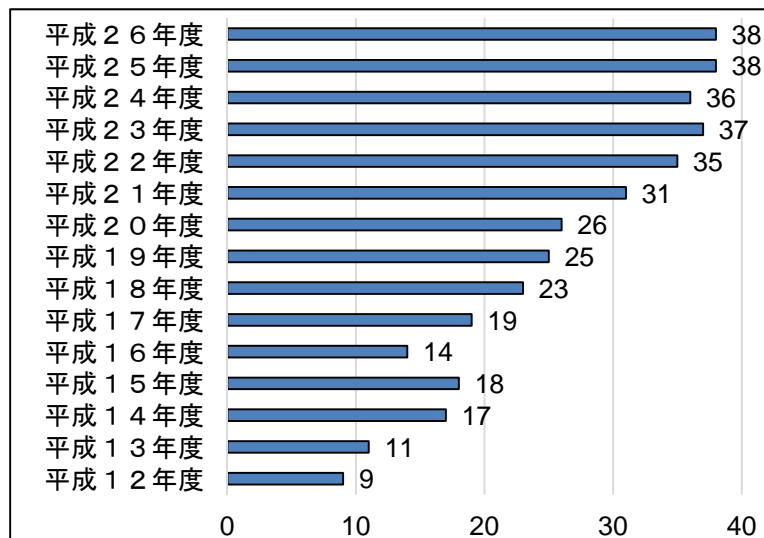
当施設は、平成8年に自立型のケアハウスとして開所し、平成22年に特定施設入居者生活介護に一部転換した。【一般型20人 特定型：30人】

よって…

⇒ 同じ施設で生活する入居者の状態に大きな差がある。

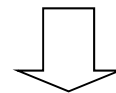
車を自分で運転して外出したり、シルバー人材センターの仕事をしている方から、要介護5の方までが生活されている。

6. 介護認定状況



平成21年度より、要介護認定者数が、30人を超えた。

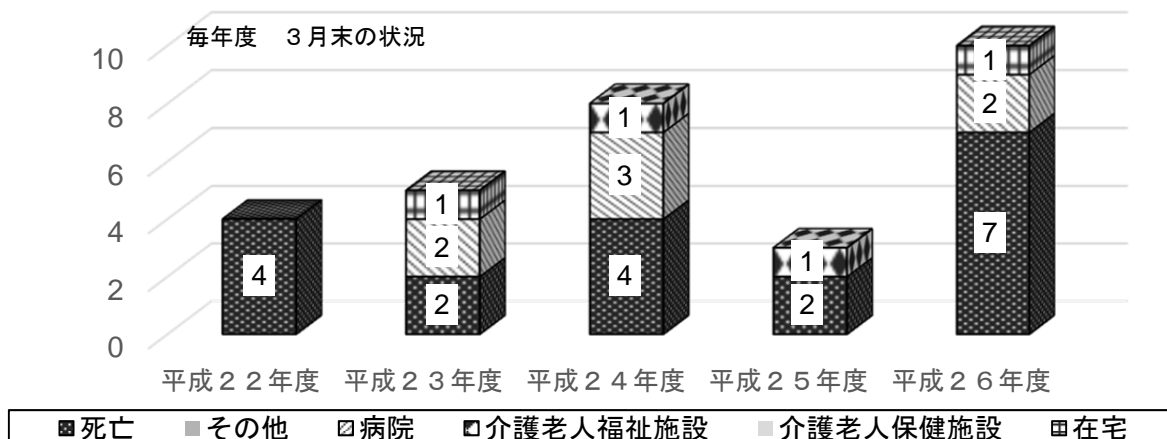
外部の介護保険サービス（ホームヘルパーやデイサービス）の利用だけでは、当施設で生活することが困難な方が増えてきた。



住み慣れた場所で、生活し続けていただくことを目的として

⇒ 『特定施設に転換』

7. 特定施設転換後の退居理由



特定施設転換 前 ⇒ 介護が必要となった場合、他の介護施設や、病院に転院。

特定施設転換 後 ⇒ 介護が必要となっても当施設での生活を継続可能。

『看取り』の対応可能。

8. 看取り介護実施状況

入居者名	看取り期間	死 因
S. M 様	H22.10.12～22.11.18	うっ血性心不全
A. Y 様	H23.1.27～H23.2.13	悪性リンパ腫
I. Y 様	H24.7.18～H24.9.16	胃癌
I. T 様	H24.2.22～H24.11.25	前立腺癌
M. K 様	H25.6.1～H25.7.1	老衰
K. T 様	H25.8.13～H25.9.20	肝臓癌
T. M 様	H25.12.2～H26.9.20	心不全
K. S 様	H26.7.23～H26.7.24	急性心不全
Y. A 様	H26.9.16～H27.2.7	肺炎
S. T 様	H27.6.19～H27.6.21	肺癌

平成22年4月以降

当施設で看取りを行った人数

⇒10人

9. 看取り介護事例紹介

当施設の看取りに対する考え方や体制に大きな影響を与えた3人の入居者の事例を紹介。

(1) S様の事例

氏名：S様（女性） 享年92歳 死因：うっ血性心不全

ケアハウス在籍期間 平成10年9月1日～平成22年11月18日

○本人から「ケアハウスで死にたい」との意向があり施設に伝えていた。特定施設に移行する前から、ケアマネージャーも、ケアハウスで看取りができるように準備を進めていた。

【S様の看取りの様子】

- ・看取り介護の経験がない職員もいる状況で、当施設初の看取り対応者となった。
- ・ご家族は当初、看取り介護に納得されていたが、苦しむ本人の様子を見て、ギリギリまで悩まされていた。

【S様の看取りを経験して感じたこと】

- ①特養での看取りを経験した時には、ご家族が看取りを決意した後、ギリギリまで悩むことは殆どなかった。⇒ ご家族の反応に関する戸惑い。

②ケアハウスの夜勤は1人しかいない。

⇒ いつ亡くなるか分からない入居者を夜間、1人で介護することの不安感や恐怖感。

(2) A様の事例

氏名：A様（男性） 享年87歳 死因：悪性リンパ腫

ケアハウス在籍期間 平成19年7月1日～平成23年2月13日

○奥様と二人で夫婦部屋に入居。

○平成22年3月頃に悪性リンパ腫と診断され、ケアハウスでの看取りが行われることとなった。

【A様の看取りの様子】

- ・退院後、奥様と一緒にケアハウスでの生活をスタート。
- ・常に奥様が、職員の介助の様子を確認されていた。
- ・A様は、亡くなる直前まで、自分の意志を言葉で伝えることができていた。

※介護経験の少ない職員に、先輩職員がA様の介助をしながら技術指導を実施していた。

⇒ 奥様から「うちのお父さんモルモットみたい。」との発言。

A様から「俺を練習台にしてくれればいいんだよ。」との発言。

【A様の看取りを経験して感じたこと】

①自分が死ぬ場所と、余命の過ごし方を入居者自身が、言葉で伝えていたことに特養での看取りとの違いを感じた。

②ご家族が24時間、職員の介助の様子を見ているという環境は特養で経験したことがなかった。

③特養とケアハウスの職員体制の違い。

(3) I様の事例

氏名：I様（男性） 享年85歳 死因：胃がん

ケアハウス在籍期間 平成20年7月1日～平成24年9月16日

○自分で車を運転し買い物に行ったり、お酒を飲みながらギターを弾いたり、ケアハウスでの生活を楽しまれていた。

○平成24年の5月に、多量の下血。検査の結果、胃癌との診断。そのまま入院となった。

低栄養と貧血が改善されない為、IVHを行うこととなった。当初、ケアハウスでは、IVHの方の受け入れは考えていなかった。しかし、Iさんが強くケアハウスに戻りたいと要望され、受け入れについて検討することとなった。

10. それぞれの思いが交錯した職員会議

所長が全職員に対して、Iさんの受け入れに関して問われた。この会議は、職員が分裂するような大きな出来事となった。

【会議の結果】

介護員以外の職員 看護員・相談員・栄養士	受け入れに賛成。
介護員	・ただ黙っているだけ。 ・やっと出て来た言葉は、「自信がない。」「それは役職者が決めればいい。」という介護のプロとは言えない言葉だけ。
担当介護員	・受け入れたいという思いはあったが、そのことを言うと、 <u>他の介護員から批判されるのが怖くて、ただ黙って、その場を過ごすことしか出来なかった。</u>



時間だけがすぎ、話は平行線のまま。

◎最終的には、所長により受け入れが決定。

介護員以外の職種は、Iさんの受け入れの準備を着実に進めた。担当介護員は、その状況を見ているだけとなってしまった。

11. 介護員としての役割

①担当介護員として実施出来たこと

⇒ 食事・排泄・入浴等の援助方法の提案・実施

②担当介護員として実施出来なかったこと

⇒ 入居者の希望・楽しみ等のメンタル面の支援



※介護員は、介護施設の中でもっとも人数の多い職種。本来であれば、お互いに相談しあい、助け合うことができる職種であるはず・・・。

◎介護の基本は『多職種協同』であり、各職種が一人一人主体的に動き、専門性を発揮しなければならない。

⇒しかし、これだけでなく、『同職種協同』も大切である。

当時の当施設の介護員は、『同職種協同』が出来ていなかった。介護員間の価値観の違いがあることは当然であるが、それを互いに理解しあうことがなかった。

12. 担当介護員として実施したこと

担当介護員の役割	担当入居者の個々の援助方法については、担当介護員が考える。
担当介護員の思い	<p>Iさんにやってあげたいと思うことはある。ただ自分の考えが、他の介護員からすると「面倒だ。」「それは違う。」と思われることが怖くて、自分から率先して意見を出すことが出来なかった。私はこの時、<u>他の介護員の顔をうかがっていた。</u></p> <p style="text-align: center;">↓</p> <p>この状況を見かねた職員より、背中を押され、本人が好きだったカラオケや夏祭りに参加していただくことが出来た。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;"> <div style="text-align: center;">  <p>大好きなカラオケ実施</p> </div> <div style="text-align: center;">  <p>夏祭りに参加</p> </div> </div>

13. I様の看取りから学んだこと

- ①不安は行動することで消えるということ。
- ②どんなに状態が悪くなくても、本人の希望を叶えることの大切さ。
- ③職員の顔をうかがうのではなく、常に入居者のことを考え、援助を行うということ。
- ④本人の望みを叶える為の行動力と勇気。
- ⑤困った時「助けてほしい」と言える勇気。

14. I様の看取り介護の経験から職員と入居者の変化

	以 前	現 在
職 員	<ul style="list-style-type: none"> ・自分に自信がない。怖い。 ・IVHなど経験がないことは、関わりたくない。 	入居者が望まれるのであれば、看取りを積極的に受け入れる。

	以 前	現 在
入居者	<ul style="list-style-type: none"> ・ケアハウスで死ぬなんてとんでもない。 ・亡くなった居室は御祓いをしてほしい。 ・正面玄関から出棺することは避けて欲しい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分もケアハウスで最期を迎え、皆さんに見送られたい。 ・正面玄関から、皆さんに見送られ出棺してほしい。

15. 介護員とは何を行う人であるか

介護員とは、食事・入浴・排泄などの身体介助をすれば良い人なのか。

介護員とは、他のどの職種よりも入居者と一番多く関わっている職種である。だからこそ、『入居者の代弁者』であり、『人生最後の道と一緒に歩む人』でなければいけないのではないか。

16. ケアハウスの介護員として求められること

- ①緊急時一人で判断し、看護師に適切な情報を伝達する医療知識・観察力の習得。
- ②入居者のメンタル面の援助。
- ③自己流ではなく統一した援助を行うこと。
- ④元気な時に入居者の夢を実現すること。

17. 最後に

介護員は「入居者の代弁者」・「人生最期の送り人」ケアハウス高浜安立の職員は、入居者の皆様が、亡くなった時に「もっと、こうしてあげればよかった。」と泣くのではなく、命があるうちに、精一杯の力で援助をし、最後は「笑って見送る」ことができるように努めていきたい。

そして、入居者の皆様に「人生 終わりよければ全て良し!」「私の人生、終わり良し!」と言っていただけるように努めていきたい。